

追悼－名匠スクロヴァチェフスキを偲んで

プログラム

去る2月21日にポーランド出身の世界的な名匠、スタニスラフ・スクロヴァチェフスキが亡くなりました。93歳でした。そこで今日は残されたライヴ音源を中心に選りすぐりの演奏をお届けします。スクロヴァチェフスキは1923年10月3日、ポーランドのルヴフ(現ウクライナ)生まれ。4歳からピアノを始め、11歳でピアニストとしてデビュー、神童ぶりを発揮しますが、手を負傷し指揮者に転身、1936年に指揮者としてデビューします。1956年、ワルシャワ国立フィルハーモニー管弦楽団の音楽監督に就任。その後ジョージ・セルの招きで渡米、1960年～1979年までミネソタ管弦楽団の音楽監督。1984年～1992年までは、かつてジョン・バルビローリが率いたイギリスのハルレ管弦楽団の首席指揮者。1994年からザールブリュッケン放送交響楽団の首席客演指揮者、2007年4月～2010年3月まで読売日本交響楽団常任指揮者を務め、2010年4月からは同団桂冠名誉指揮者となりました。その他、ベルリン・フィル、バイエルン放送交響楽団、BBC交響楽団、ミュンヘン・フィル等多くの名門オーケストラを指揮、欧米ではその長い名前から“ミスターS”という愛称で親しまれ高い評価を得て来ました。日本のクラシック・ファンの間で広く知られるようになったのは、1990年代に入ってザールブリュッケン放送響とブルックナーの交響曲全集をスタートさせた頃からで、その後ブルックナー指揮者として名声を得て行きますが、元々レパートリーは広く、ブルックナー指揮者という肩書きは妥当ではない気がします。1996年には初めてNHK交響楽団を指揮、その演奏は鮮烈な印象を残しました。スクロヴァチェフスキは作曲家としても知られ、一部の作品は日本でも演奏されていますが、同じ作曲家出身のブーレーズとは違い、もっと職人的な味わいを持った指揮者と言えなくもありません。明快で堅実な音作りをしますが、そこに“ハッ”とするような新鮮な響きが加わり、緻密に計算された構築性の素晴らしさを感じます。今日は得意のブルックナーと、お馴染みの名曲をライヴ音源でお聴きいただく他、市販CDからのエルガーの「エニグマ変奏曲」はこの名匠の隠れた名盤としてお薦めの一枚です。ごゆっくりお楽しみ下さい。

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770～1827) :

序曲“レオノーレ” 第3番 *op.72b*

スタニスラフ・スクロヴァチェフスキ指揮読売日本交響楽団
(2012.3.12 東京オペラシティ・コンサートホールでのLive)

ピョートル・チャイコフスキー (1840～1893) :

ヴァイオリン協奏曲ニ長調 *op.35*～抜粋

ヘンリク・シエリング (Vn)
スタニスラフ・スクロヴァチェフスキ指揮北ドイツ放送交響楽団
(1975.9.7 モントルー国際会議場ホールでのLive)

アントン・ブルックナー (1824～1896) :

交響曲第3番ニ短調～第4楽章

スタニスラフ・スクロヴァチェフスキ指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(2011.5.28 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

*** 休憩 ***

ロベルト・シューマン (1810～1856) :

交響曲第4番ニ短調 *op.120*～第1楽章から、第3楽章から、第4楽章

スタニスラフ・スクロヴァチェフスキ指揮NHK交響楽団
(1996.2.8 NHKホールでのLive)

エドワード・エルガー (1857～1934) :

エニグマ変奏曲(変奏曲“謎”)～終曲

スタニスラフ・スクロヴァチェフスキ指揮ザールブリュッケン放送交響楽団
(1994.10.14 ザールブリュッケンでのスタジオ録音CD盤)

アントン・ブルックナー (1824～1896) :

交響曲第7番ホ長調～第1楽章から、第2楽章から、第4楽章

スタニスラフ・スクロヴァチェフスキ指揮NHK交響楽団
(1999.1.21 NHKホールでのLive)